

# 乙女の涙ものがたり

井上石灰工業株式会社。「乙女の涙」というトマトの品種を開発し、農業経営、また流通に至るまで一貫して行うこの会社が今回の主役だ。

創業から135年の歴史を持つ同社は、高知県内外で長らく、良質な石灰製品を提供することを生業として発展した。農業とはおよそ結びつかない社名の同社が、なぜ今、「乙女の涙」というトマトを栽培するに至ったのか？今回はその真相を探るべく、高知県香南市を訪れた。

「もともとこのトマトが生まれたのは偶然だったんです。」

乙女の涙について教えてくれるのは、育種グループの大畑宏史さん。

井上石灰工業株式会社では

2010年に育種グループが発足。当初はいろいろな品種開発に取り組んでいた。その中で最もいい出来だったのが、「乙女の涙（別名：スウィーティア）」。

細長い涙型の珍しいトマトである。「何より形がユニークで、可愛い。味も甘くて美味しい。これなら高知の新しい特産になるのではと考えました。」

## なぜ農業？

そもそも、どうして農業の分野に進出したのだろうか？そこには高知という地域に対する想いや、日本の農業への想いがあった。

「井上石灰工業株式会社は、農業の現場で使う石灰製品の販売を通じて、長らく農家さんと深

い繋がりがありました。日本の農業が大きな曲がり角に直面している中で、自分たちにも何かできることがあるのではないかと、と育種部門を立ち上げたのが始まりです。」

「もともと高知県は、生産量こそ多くはないものの甘くて美味しいトマトが育つ環境に恵まれていました。開発で生まれたトマトをブランド化することで、新しい高知の特産品として地域に新しい価値を育んでくれることを目的として『乙女の涙』の栽培事業を拡大するに至ったのです。」

## 負けないブランドを作る

「高知県のトマトは美味しい。農家さんは良いものを作っている自負があり、こだわりがある。しかしそれが市場にあまり伝わっていないことに対してもっとたいなさを感じていました。」

そもそも、日本のトマト農業自体が大きな転換期を迎えている

ます。全国各地のいろんなトマト農家さんの状況を耳にしますが、厳しい経営をされているところも少なくありません。」

生産効率が上がりに、設備も良くなることで、年々トマトの生産量は上がる。だが、魅力を伝える需要を掘り起こさなければ消費量はなかなか増えない。せっかく良いものが獲れても市場価値が下がってしまう。そこでキーワードとなるのが、他にはない付加価値のあるブランドの開発だ。





## 栽培のこだわり

「乙女の涙は、生産が極めて難しい品種です。管理ポイントを押さえてテクニカルな生産が必要になります。」

驚くべきは、その生産方法。毎週苗のコンディション（茎の太さや、花の数等）を計測して調査し、それが翌週の栽培に反映される。現在3軒の契約農家に栽培を委託しており、大畑さんらが近距離で連携を取ること、我々消費者が求める品質の規格に沿ったものが生まれている。

「本来放置すると10cmくらい、この大きさに育ちますが、味が良くない。甘みが減り、全体的にパツとしない味になってしまいます。そこで、最適になるよう水分を調整して収穫することにしていきます。そうすることで糖度が9度〜10度くらいの甘いトマトを安定して出荷することができます。」

## 今後の展開

今後乙女の涙の市場価値を高めるために、井上石灰工業株式会社が目指すこと。

「野菜として青果売場に並ぶだけでなく、新たな市場開拓が必要になってきます。トマトの食べ方のチャンネルを増やしていきたい。農家さんはそのまま生で食べるのが一番美味しいと言います。自分の作ったものに自信があればこそその言葉ですが、これから消費を伸ばすためにはそれだけでは足りないでしょう。もっとユニークな食べ方を発信していきたいですね。」

生のトマトをまるごと求肥で包んだ旬果瞬菓 共楽堂のお菓子「ひとつぶの乙女の涙」。新しいトマトの食べ方として浸透し、乙女の涙のPRに繋がると嬉しい。そして、この商品がトマト農家さんに少しでも貢献することを期待したい。

